

学校における部活動が生徒におよぼす影響

学籍番号 199344

氏名 文 舜孝

主指導教員 石川美久

1. 背景および目的

昨今、学校現場では様々な問題が課題としてあげられている。その中でも、岸本(2019)が示しているように、部活動は解決すべき喫緊の問題とされている。部活動とは、高等学校学習指導要領(2009)にて、「生徒の自主的、自発的な参加により行われる部活動については、スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等に資するものであり、学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること」とされている。この自主的、自発的とは教員にもあてはまるものであるが、村上(2019)は、多くの学校で生徒も教員も半ば強制参加を余儀なくされていることを示唆している。部活動の問題を解決する方策として、大きく分けて学校内で作り変えていく方法と、学校外で扱っていく方法に分けて検討されてきた。

学校内で作り変えていく方法として、文部科学省が主体となって、部活動を学校に残す方法も、外部指導員(部活動指導員を含む)やガイドラインの作成などで改善されようとしてきた。また部活動を学校外で扱う方法は、石井(2015)や乙幡(2008)が示唆している通り、総合型地域スポーツクラブへと移行していく方法が検討されてきた。

一方、中澤(2020)によると、部活動そのものを廃止する考え方があることも指摘している。

こうした動向をもとに、部活動を存続させるための根拠として、部活動が含む価値を明らかにする必要がある。そこで本研究は、部活動の価値を教育的側面から検証し、部活動を存続させるための資料を提示することとした。

部活動は文部科学省により、教育課程との関連が図られるものとするものとされている。その教育課程の目標として挙げられる「生きる力」が、WHOの示すライフスキルと一致していたことから、部活動とライフスキルの関係について調べることで、部活動の価値の一つを提示することとした。

2. 方法

調査方法は、アンケートを用いた。対象はA中学校および高等学校の全生徒636名とし、質問項目は、東川ら(2018)の研究を参考に、独自の1項目を追加した全19項目を作成した。アンケートにて扱うライフスキルについては、国立青少年教育機構(2017)の示す「へこたれない力」「コミュニケーション力」「意欲」「自己肯定感」に加えて、独自の「自律性」を加えた5つの尺度に分類し比較した。統計処理については、統計解析ソフト(エクセル統計およびHAD17-102)を用いて行い、統計的有意水準は5%未満に設定した。

3. 結果および考察

3. 1 部活動経験とライフスキルの関係

部活動経験とライフスキルの関係に関して、まず所属経験において、部活動所属群が、未所属群よりもライフスキル獲得の得点が高いことが示された。また、レギュラー経験のある生徒においてライフスキル獲得の得点が高い傾向にあった。このことから、部活動に所属するだけでなく、責任のある役職やポジションにつくことで、自らの役割や立場に自信を持つことで、他人と積極的にコミュニケーションをとったり、部活動への意欲的な参加の姿勢を見せたりする傾向にあることが示された。

3. 2 活動における取組の内容とライフスキル獲得の関係

部活動においてどのように活動している、特に部の活動やムードが好きであったり、自らの意見が部活動に反映されやすかったりする場合には、ライフスキル獲得の得点型傾向にあることが示された。顧問のかかわりについて差はみられなかった。これは、顧問の介入が少ないと回答している生徒が多い傾向にあり、学習指導要領にて示される、「生徒の自主的・自発的な参加により行われる」という内容にあてはまっているが、顧問の介入の少なさ故に生徒が自由奔放に活動してしまっていることが関係していると考えられる。

このように、部活動への所属・未所属や役職などだけではなく、部に関しての活動内容も重要であるということが明らかとなった。自らの強みを意識し、それに伴った目標を掲げ、そこに至る計画を立て、仲間と交流・評価し合い、計画の修正を行っていく。そうすることで、「へこたれない力」「コミュニケーション力」「意欲」「自己肯定感」「自律性」の力の獲得に繋がっていく。これらの能力の多くは、部活動の中で必要とされるだけでなく、文部科学省が目指す、生徒の新しい姿としての「生きる力」と密接に関連するライフスキルとして学校生活全体で求められる。このように、ライフスキルの獲得を一つの目的とした部活動を行うことで、その経験を部活動の中だけにとどまらず、学校生活や社会に出てからの自らの人生と深い関係を持たせることができると考えられる。

4. まとめ

本研究では、学校において目指されている「生きる力」と共通しているとしたライフスキルという観点から部活動の価値を見直すため、生徒の部活動への参加状況や取り組み方が、ライフスキル獲得にどのように影響をおよぼしているかについて調査することを目的とし、所属や活動内容によりライフスキル獲得に差が出る結果が示された。

今回は、あくまで本研究を実施したタイミングでのライフスキルの数値を測定したに過ぎず、生徒一人一人が部活動に所属することでライフスキルがどのように変化したかを経過観察することができなかった。しかし、当初の目的である部活動の価値をライフスキルの観点から見直すことに対し、一つの事実として、提示することはできた。この結果をもとに、部活動存続の教育的価値を再確認し、問題視されている制度の見直しを、外部指導員や外部クラブの活用等を含めて検討していきたい。